

日陰のベンチを探して、清野篤史は公園の中を歩いていた。せいのあつし

手には缶コーヒを持ってゐる。外回りの途中に、たまにここへ来て休憩する。サボリというほど大袈裟なものではない。誰でもやっていることだ。

午後のこの時間は人もまばらで、ジョギングをしている人もいた。とりたてて変化のない日常の一コマのように見えた。

広い公園の中をしばらく歩き、ようやく良さそうなベンチを見つけた。篤史はそちらに足を向けて、空いているベンチに腰を降ろした。

心地いい風が吹いてくる中、缶コーヒのプルトップを引いて、一口流し込む。木々の葉が揺れる音が聞こえてきて癒される場所だった。

彼は横に置いたカバンの中から携帯を取り出して、画面に目を落とした。

ネットニュースをチェックする。何か目を引く出来事がないか確かめてみた。政治絡み、芸能絡みのことばかりで、特に目を引くニュースはなかった。

次にSNSを開いてみる。下にスクロールしていき、おもしろそうな書き込みがないか見てみた。特に何もない。彼は軽く落胆した。

今日は先方から解約を食らった。保険の営業をやっていると、こういうことは付き物だ。とはいえ、やはり解約されるのはショックが大きい。会社に戻り辛いし、上司に報告すると思うと胃が痛くなってくる。「お前の説明不足だ!」「だからお前はダメなんだ!」などなど、こっ酷く怒られる。ああ、ストレスが溜まる。

やはり自分には向いてないのかと悩んだりする。彼は目の前の舗道をなんとはなしに見つめていた。

「お兄さん」

後ろから声が聞こえた。拍子抜けで能天気な声だった。自分が呼ばれているのか、と思いながら、そちらを振り返ってみた。

「なにしてんの？ 浮かない顔して」

明るい笑顔で、ニコニコしながら話しかけてくる若い女の子？ がいた。

「ええ……」

篤史はそれだけ言うのが精いっぱいだった。急に話しかけられて、返す言葉が見つからない。

男子か女子かも分からないような子は、白いタンクトップの上に黒いブルゾンを着ており、下にはスキニーパンツを穿いている。靴はスニーカーだ。こういうタイプの子と何を話せばいいのか、どんなテンションで差し向えばいいのか分からない。

